

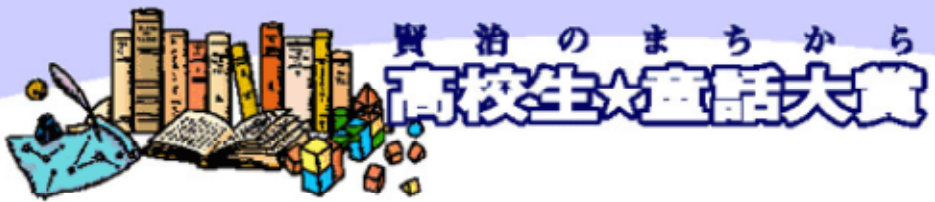
第 13 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「鬼の子トキ」

埼玉県立浦和第一女子高校 3 年 上田 侑乃



賢 治 の ま ち か ら
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

鬼の子トキ

埼玉県 浦和第一女子高等学校三年

上田

侑乃^{ゆきの}

その日は、朝なのか昼なのか、夜なのかも分からないほど、どんよりと暗い日でした。病院の窓から見上げると、重たそうな黒い雲が、もこもこと空一面に敷き詰められて、今にも落ちてきそうでした。庭の植え込みにはなんの花もなく、地面もただ灰色にじっとり湿っています。見ているだけで、なんだか息苦しくなるようでした。

良太は窓をからからと閉め、白いベッドに寝ているお母さんの方を振り向いて、小さくため息をつきました。良太のお母さんは体が弱く、明日には大きな手術を控えて入院しているのです。良太は大好きなお母さんが心配でしたが、昨日お医者さんが、手術をすることがお母さんの病気には一番良いのだと、良太とお父さんに説明してくれました。しかし、今日の天気がこれでは、明日の手術はきつと上手くいかないんじゃないかと思えてきます。お母さんの顔をのぞき込むと、汗ばんで真っ赤になったお母さんが、良太に微笑みかけました。そんなお母さんに、良太は優しく声をかけました。

「僕、今日も神社に行くってくるから」

「今日も行ってくれるの?」

お母さんがかすれた声で言いました。

「うん。今なら雨降ってないし、早く行つとかなないと途中で降りそうだからさ。お父さん来たら、すぐ帰るって言つといてよ」

窓の方を見やりながら良太が言うと、

「分かった。ありがとう。お天気悪いなら傘持って行きなさい」

と、お母さんは寝たままの格好で首を横に伸ばし、

「あれ、私の傘。持ってたって」

と指さしました。殺風景な病室の隅に立てかけてある傘はお母さんの好きなピンク色だったので、ピンクかぁ、と良太は一瞬迷いましたが、結局持つて行くことにしました。



良太には、お見舞いの帰りにいつも必ず行く所がありました。それは、病院から出て家とは反対方向に歩くと見える、小さな山の中に立つ、これまた小さな神社でした。手入れもされていないので汚く、所々壊れた寂しい神社で、しかも良太はこの神社に自分以外の参拝者がいるのか、どんな神様がいるのかすら知りませんでした。しかし、なんとなく毎日ここに来て、お母さんの病気が治りますようにと五円玉をお賽銭箱さいせんに投げるのでした。

今日もふうふう言いながら山を登って良太が神社へやってくると、いつもと神社の様子が違います。お賽銭を投げる前に鳴らす大きな鈴が、いくら綱を揺らしても鳴らないのです。変だなと思って上を見ると、なんと鈴だけそっくりなくなっているのです。昨日まではあったのに、誰が取ったのだろう、もしかして落ちて転がっているのかな、と良太が辺りをきよるきよるすると、境内から勝ち誇ったような大きな声がしました。

「お探しの品はこれかい、このうるさい鈴だろ。こんなの毎日鳴らして一体何が楽しいんだい!!」

良太がびっくりして振り向くと、さび付いた鈴を小脇に抱えて仁王立ちしている、良太と同じくらいの背丈の男の子がいました。

「お、お参りだけど」

良太は急に怒鳴られたので驚いて、震える声で答えました。すると、今度はそれを聞いたその子も驚いたようにぽかんと口を開けて、

「お参り? ここに?」

と言うのです。その子は目をまんまるくして、鈴を抱えたまま境内を降りて、良太の前の賽銭箱にぴょんと飛び乗ったので、賽銭箱がみしつと音を立てました。目の前で穴が開くほど見つめられて良太はどぎまぎしてしまいました。が、明るいところに出てきてくれたおかげでやっと良太にもその子の姿がちゃんと見えました。そして、その子におかしな所があると気づいたのです。

ぼさぼさの黒い髪の毛。そこから何か尖とがった物が頭の上から一本、突き出ています。暑い日ではないのに、汚いズボン一枚で、胸ははだか。鈴を持つ手は爪が伸びていて、鮮やかなピンク色。手だけではありません、顔も、足も、はだかの胸も、その子の体はペンキをかぶったかのように、丸ごときれいなピンク色だったのです。



「君……君、何？」

見たこともない姿に良太はすっかり度肝を抜かれ、ぱくぱくする口からやっと出た言葉はそれだけでした。ピンクの子供は答えずに、

「お前、どっかで会った？」

とつぶやきました。良太が目をぱちくりさせ、

「いや……知らない」

と言うと、ピンクの子供はフンと鼻を鳴らして言いました。

「俺はこの神社に住んでる鬼の子。お前さ、この神社にお参りなんかしたって無駄だよ、神様なんてとつくのとうにいないんだから」

そう言うのと鬼の子は、賽銭箱から良太の横へひよいと降りました。

「え……？」

「空き家になったから俺が勝手に住んでるんだ。静かでもいいよ、ここは！でも最近はお前が毎日やってきて、ぼろい鈴をガランガラン鳴らして、うるさいったらありゃしない。俺にお願いなんかされても叶えてやる力なんてないんだから、もう来ないでおくれ!!」

鬼の子の耳を疑うような言葉が良太の心に次々と突き刺さりました。この神社に神様はいなかったのです。今までお願いしてきたことは無駄だったのです。真っ黒な空からついに雨が降り出しましたが、良太は気付きませんでした。鬼の子が良太の手から勝手にお母さんの傘を取り上げて、二人の間に広げました。良太は真っ青でした。頭の中で、ただただお母さんの顔が浮かんで消えます。手術は明日……気づくと良太は泣き出していました。

急にわあわあ泣き出した良太を見て、鬼の子はうんざりだといった様子です。

「ああやだやだ、これだから人間は！自分の思い通りに行かないとすぐこれなんだから、嫌んなるよ。僕が働いている地獄でもね、悪い人間が、反省しないでずっと泣いているだけさ。地獄にはそんなやつばかりだ。天国には良い人間ばかりがいるとか聞くけど、良い人間がいること自体が信じられないね！」

好き放題言う鬼の子に、良太は泣きながら腹が立ってきました。良い人間がないだなんて、なんだか大好きなお母さんまで悪い人だと言われたようで、悔しかったのです。



「僕は、自分のために、お参りしてたんじゃ、ない！」

良太は泣きながら叫びました。

「僕のお母さんが、病気で、手術で、大変で、それで、成功しますようにって……」

嗚咽おえつで言葉が途切れ、息が苦しくなって、それ以上良太は何も言えなくなっていました。唇をかみしめて鬼の子をにらみつけると、鬼の子は少しづつが悪そうに、

「でもさ、そんならお賽銭は5円玉ばかりじゃない。お母さんのためにしてはけちだなあ」

と言いました。

「それは……」

「それは？」

「……ご縁がありますようにって……神様と」

鬼の子はまたぼかんと口を開けました。良太は少し恥ずかしくなって下を向きました。

「そんな意味だったの？」

鬼の子があきれ果てて聞きます。良太がうなずくと、鬼の子は……笑い出しました。

「あははは！ おっもしろいなあ！ それじゃあ、自分以外の人のために毎日山を登っていたのかい？ 君みたいな人間は初めて見たね。さっきは酷いひどことを散々言ってごめんよ。君ならいつでも歓迎さ！」

鬼の子は嬉しうれそうに笑います。しかし、良太に嬉しい事などありません。

「もう来ないよ」

小さい声で言いました。

「神様がいないなら、お願い事しても仕方ないじゃないか。僕はお母さんの病気を治したいんだ」

良太は鬼の子の手から傘を取り返すと、くるりと背を向け帰ろうとしました。すると、

「それなら良い方法が一つだけあるよ」

鬼の子がゆっくりと言いました。良太が振り返ると、鬼の子は



「僕が、天国勤務の鬼になればいいんだ。鬼にとってね、天国で働くことはとっても珍しくて、すごいことなわけ。だから天国へ行く前に、ご褒美として何でも一つ願いを叶えてもらえるんだよ。そうしたら君のお母さんも元気になるさ」

そういつてにかっと笑いました。良太はその申し出に驚きました。

「でも、せっかくのご褒美を僕のお願いのために使ってくれていいの？」

「別にいいよ。俺、ずっと地獄で働いていたから、良い人間というものを見たことがないんだ。鬼はみんなそうだよ。天国に行つて、良い人間ばかりの所で働くことになれば、きっと楽しいだろうなつて、小さい頃から思つてた」
鬼の子は楽しそうに目を細めました。

「ほんとだね、俺も昔はそのことをお願いしにここに来てたの。でも、がっかりだったぜ、ここに誰もいないつて分かつた時。あんまりむしゃくしゃしたから、思い切り暴れて、所々壊して、ここに居座つてやつたんだ」

そう言うつと鬼の子は少し黙つて辺りを見回しました。つられるように良太も神社の周りをぐるりと眺めました。半分無くなった狛犬や折れた鳥居は痛々しく残つて雨ざらしになり、割れた石畳には水がたまっています。鬼の子が落胆と怒りのあまり暴れ回つてゐる姿が、良太の目に浮かびました。良太は鬼の子に協力してやろうと思ひました。

「ねえ、いつまで傘さしてるの？」

急に鬼の子がクスリと笑います。良太が空を見上げると雨はとうにやんでいました。お母さんの傘をたたみながら、良太は鬼の子に尋ねました。

「君、名前はなんて言うの？」

「俺？ 俺は、トキ。良い名前だろ。お前は？」

「良太。良い名前だろう。それで、トキ、君が天国に行けるようになるには、何をどうしたらいいのかな？」

それを聞くと、トキはぱつと目を輝かせて、言いました。

「手伝つてくれるんだね？ 嬉しいよ。鬼が天国へ行くためには、優しい心に触れた事を思い出さなければならぬんだ。それが難しいんだけど」

「優しい心？」



「そう。この世の命はね、みんな誰かの優しい心に触れて生まれてくるんだ。鬼だって同じだよ。でも、鬼はそれを忘れてしまう。ううん、忘れてしまったから地獄で働く鬼になるんだ」

つまり、トキがいつか誰かに優しくしてもらったことを思い出せればいいのです。トキは今までずっと地獄にいたのですから、地獄に何か手がかりがあるかもしれません。良太がトキにそう言うと、トキは良太を地獄に案内できると言い出しました。

「地獄に行くの!？」

「そうだよ。大丈夫、お前は俺の案内で行くんだし、地獄ではここと時間がずれてるから、夕方までには帰ってこれるんじゃないかな」

トキは涼しい顔で答えます。余裕たっぷりなトキの様子を見て、良太は少し怖いけれど、案内してもらうことにしました。

地獄への入口は、境内の奥にありました。緩んだ床板をトキが外すと、その下には地面ではなく、真っ暗な大きい穴があったのです。

「俺につかまって。離れちゃだめだよ」

トキが言いました。良太は無言でうなづきました。今から地獄へ行くのだと思うと緊張で声が出せなかったのです。

「いい? 行くよ? いち、にい、……さん」

良太とトキはお互いにしっかりと抱き合いながら、穴へ飛び込みました。そして、真っ暗な穴を長い間落ち続けました。あんまり時間が長すぎて、最初のほうは良太も心臓が止まりそうでしたが、そのうち慣れて、下からごうごうと吹く風を心地よく思いました。しばらく落ち続けると、真っ暗な足元にぽつんと現れた灰色の点がどんどん広がって、それが河原だと分かるまでになりました。

「着地だ!」

トキが叫び、良太が下を見ようとした瞬間、
バシャーーーーーーン!!!!!!

二人は灰色の水の中に飛び込みました。良太が浮き上がろうともがいてみると、力強い何かに腕を引っ張られ、良太はすぐに水面へと引きずりだされました。

川辺で四つん這いになり、ぜいぜいと息を整えていると、



「一体何のつもりだ!!!」

野太い声が頭の上で響き、横で

「あいたっ!」

というトキの声が聞こえました。顔を上げると、横でトキが真っ赤な鬼にげんこつをされていました。

「またお前か! 三途さんずの川に飛び込むなんていたずらが過ぎる! ここに近づくな!」

トキは頭を押えて涙目になっていました。

「さっさと出て行け!!」

赤鬼に追い立てられ、良太とトキは急いで川を離れました。

「こんな所に優しい心なんてあるはずないよ。みんな俺が嫌いなんだから」
口をとんがらせてトキがつぶやきます。地獄が嫌で、天国に行きたいという鬼は変わり者だと思われて、仲間はずれにされるのだそうです。

「優しい心……トキ、今まで誰かにご飯を作ってもらったこととかないの?」

「鬼にご飯はいらないからね」

トキはむすっとして答えます。

「誰かに遊んでもらったことは?」

「ない」

「誰かに励ましてもらったり、看病してもらったり、褒めてもらったり……」
「ないない」

それでは今まで、トキはどうやって地獄で暮らしてきたのでしょうか。あっちに行ってもこっちに行っても、良太とトキは追い出されました。地獄の鬼達はみんな、トキの仲間のはずなのに、トキを目の敵にしているようでした。棍棒こんぼうを振り回してくる鬼さえいました。

足が棒になるまで二人は地獄を歩き回りました。しかし、優しい心どころか、トキに普通に話しかけてくる鬼すら一人もいませんでした。トキは肩を落としていました。

「もう帰ろう」

トキは力なく良太に言い、良太の手を引っ張ってそばの地面に大きくあいた穴に身を投げました。良太があつと声を上げる間もなく、二人はくるくる回りながら穴の底へと落ちていきました……



良太が目を開けると、そこは夕日に照らされたあの寂しい神社でした。折れた鳥居が、昏間と同じ姿のままオレンジの光の中にしんと立っていました。良太はその鳥居の足下に、こちらに裸の背を向けて小さく丸まっている、トキを見つけました。

「ごめん」

良太が近づくと、トキが小さな声で言いました。

「お母さんのことは諦めて。俺も天国の事は諦める。俺は地獄でも嫌われ者だし、人に優しくしてもらったことがあるのに、思い出せないような奴なんだ。俺には地獄の鬼がお似合いなんだ」

良太は何を言ったらいいのか分かりませんでした。トキの肩が小さく震えています。泣いてるのかな、と良太は思いました。気づくと良太は、こんなことを言っていました。

「僕はトキのこと、好きだよ。君、ほら今、夕日に輝いてすっごく綺麗なピンク色してる。お母さんがずっと前に教えてくれたことなんだけど、今の君みたいな色のことを鴉色とぎって言ってね、お母さんの大好きな……」

言った瞬間、あれっとな良太は思いました。トキも、そっとな良太を振り向きました。良太の言葉が、トキがずっと忘れていた、ある日の出来事を思い起こさせました。

「……それ、俺、前におんなじこと、言われたこと、ある……」

トキが目を見開いて、ゆっくりと言いました。

トキは、ずっと前に、間違えて三途の川まで連れて来られた女の子の事を思い出していました。地獄の鬼達の誰からも仲間に入れてもらえず、トキが川辺でくすくすんと泣いていた時のことでした。

『私は、あなたのことが好きよ。気づいてる？ あなたって、とても綺麗なピンク色をしてるのよ……』

『こういう色を鴉色とぎっていうんだって、お母さんが言ってたわ。名前が無いの？ じゃあ、私はあなたを、トキって呼ぶわ』

女の子が、トキの涙を拭きました。そうして笑った顔は、どこか良太の面影がありました。重い病気で来たけれど、まだ寿命が残っているからと、人間の世界に送り返された女の子。



「鴉色……トキ、だから……俺はトキって言うんだ!! 良太! お前のお母さんだ!」

良太は急にトキが興奮し始めたのでびっくりしてトキを見つめていました。トキの言葉はだんだんと早口に、甲高い悲鳴に似たものになっていき、最後には叫び声に変わっていました。

「俺に初めて優しくしてくれた!! 思い出したぞ……!」

その瞬間。あたりが急に真っ白なまばゆい光に包まれ、トキのピンクの体も見えなくなりました。良太は急な光に目がくらみ、慌てて左腕を両目に押し当てて右手でトキを掴もうとしました。しかし、さっきまで目の前にいたはずのトキを捕まえることは出来ず、手は空を掴むばかりでした。

「トキ!!」

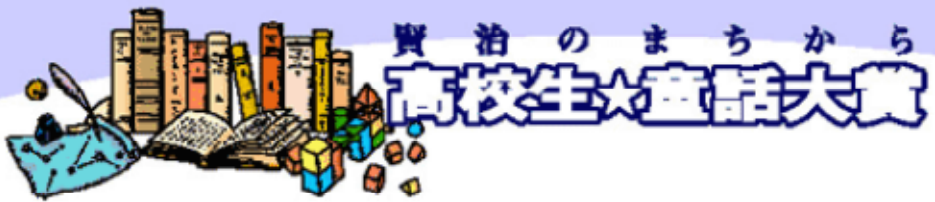
良太が叫ぶと、頭の中の遠くの方で、(良太ありがとう)と言うトキの声が聞こえたような気がしました。意識がふうっと遠のいていき、良太の全身から力が抜けました……

「お母さんも小さいころにトキに会っていたなんて、なんだか不思議だなあ」
「私も、トキも鴉色なんて言葉も、忘れかけていたけどね。でも、だからきくと私、ピンク色が好きだったのよ」

あの後、なかなか良太が帰って来ないので心配したお父さんが良太を捜しに来ると、良太は賽銭箱の前で気を失い倒れていたのです。気がついた良太がいくら神社を探してもトキの姿は見えず、緩んだ床板の下の穴は消え、すっかりした地面だけがありました。どうやらトキは本当に、天国へ行けたようでした。

「退院したら母さんをその神社に連れて行ってね。トキに、ありがとうもさよならも言っていないから」

お母さんがにこにここと笑います。お母さんはトキの事をなんとなく覚えていました。良太が神社での不思議な出来事を話す間、お母さんは楽しそうに、そして少し懐かしそうに、頷いたり微笑んだりするのでした。お母さんの体調はトキのおかげかずっと良くなり、お医者さんももう大丈夫だと言っています。



「鈴木ちゃんと元通りについてたからな。鳴らしてやろうよ、思いっきりうるさく」

「ガランガランってね」

二人で声を上げて笑いました。雨上がりの、透き通った美しい昼下がりでした。病室から見える庭の植え込みには、いつの間にかピンクのアジサイが幸せそうに花を咲かせており、遠くの空には虹が出ていました。